

即身成仏思想についての一考察

— 安然の成仏論と異本『即身成仏義』をめぐって —

間 野 泰 博

一 問題の所在

真言密教において成仏思想の中核をなすものは即身成仏思想であり、弘法大師空海（七七四～八三五）は、『即身成仏義』を著わしその思想の理論化を図られた。私は弘法大師空海の即身成仏思想の理解を目的として『即身成仏義』についての考察を行い、六大・四曼・三密を体・相・用に配し、多重構造の思想が展開されていることを理解した。大学院修士課程において、その弘法大師空海の即身成仏思想が後の世においてどのように受け入れられていったかを研究しようと考え、まず異本『即身成仏義』の研究を行った。この異本『即身成仏義』の考察においては、主なる特徴として三種即身成仏思想が挙げられ、その成仏論は弘法大師空海の即身成仏の表現とは異なるものと推論した。また、異本『即身成仏義』中のその他の思想・引用經典等に着眼してみると天台密教との関連性が多少なりとも見受けられた。特に『真言宗即身成仏義一卷』（以下『弘法大師全集』に収録されている順に従って、異本『即身成仏義』③、異本『即身成仏義』④、……とする。）

に引用されている『蓮華三昧經』（『蓮華三昧經』は異本『即身成仏義』④⑤⑥においても引用されているが、異本『即身成仏義』③④⑤⑥は内容が類似しているため、異本『即身成仏義』③を中心に考察する。）に注目すると、天台密教の大成者である五大院安然（八四一―八八九？）との関連性を推測することができた。そこから、安然の即身成仏思想を研究する事によって、異本『即身成仏義』との関係性、更なる即身成仏思想の展開が明らかにできるものと考えこの問題を取り上げた。

今後の展望として真言密教の立場から台密の成仏論を中心に研究して行こうと考えており、今回の発表においては、異本『即身成仏義』③に引用された『蓮華三昧經』とその他の経論についての考察を行い、安然と異本『即身成仏義』の関係性を探ると同時に、安然の代表的な著作である『即身成仏義私記』（以下『即身義私記』）・『真言宗教時義』（以下『教時義』）・『胎藏金剛菩提心義略問答抄』（以下『菩提心義抄』）とを取り上げて考察を行い、安然の即身成仏思想を明らかにすることを目的として取り組んだ。

一一『真言宗即身成仏義一卷』（異本『即身成仏義』③）の引用経典の考察

（一）『蓮華三昧經』について

『蓮華三昧經』とは具名を『妙法蓮華三昧秘密三摩耶經』といい、不空三蔵（七〇五―七七四）の翻訳として『正統蔵經』に収められており、『法華經』を密教化した経典として考えられている。また、いわゆる「本覚讃」として、天台宗において常用経典として読誦されているものを含んでいる。その「本覚讃」とは次の七字八句からなる頌である。

本覚心法身に帰命す

常に妙法心蓮台に住す

本来、三身の徳を具足し 三十七尊、心城に住す

普門塵数の諸三昧 因縁を遠離し、法然として具す

無辺の徳海、本円満す 還つて我、心の諸仏に頂礼す⁽¹⁾

この『蓮華三昧経』を引用した一番初めの書物とされるのが、智証大師円珍（八一四～八九一）の『入真言門住如実見講演法華略儀』⁽²⁾（以下『講演法華儀』とする）である。『講演法華儀』では、

普礼三心城中一切聖衆、頌曰⁽³⁾

として頌が挙げられていることから、『講演法華儀』においては、『蓮華三昧経』また「本覚讃」等の具体的な名称は示されていないことが分かる。しかしこの『講演法華儀』については偽撰の疑いがもたれている。⁽⁴⁾

続いて安然の著作においてみると、『教時義』巻一では「蓮華経説」⁽⁵⁾、同巻二では「大蓮華三昧経云」⁽⁶⁾、『菩提心義抄』巻一では「如蓮華三昧経云」⁽⁷⁾、同巻四では「大蓮華三昧経云」等となっており、『講演法華儀』においては見られなかった經典名を具体的に挙げていることが分かる。異本『即身成仏義』③においても、「無障礙経に云く^{名蓮華三昧経}」となっており安然と同時代かそれ以後の成立と考えられ、安然との関係性が認められる。但し『蓮華三昧経』の「本覚讃」の成立をめぐることも、その真偽も疑われている。従来は不空訳とされてきたが、近年の研究成果を見ても偽経として扱われている。⁽⁹⁾

（2）異本『即身成仏義』③に引用されているその他の經典の考察

次に、安然の著作である『教時義』の中に、異本『即身成仏義』③で引用されていた他の経論を探してみると、『菩提心論』二文・『大智度論』⁽¹⁰⁾・『華嚴経』⁽¹¹⁾・『諸法無行経』⁽¹²⁾・『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』⁽¹³⁾・『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』⁽¹⁴⁾の同様と思われる文章が引用されており、（その他異本『即身成仏義』③には、

『大日経』・『金剛頂経』・『仁王般若経』・『釈摩訶衍論』・『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』・『典拠不明な経典、が引用されている。〕重複している引用が多数あることが考察された。

特に『華嚴経』・『諸法無行経』の引用に注目してみると、『華嚴経』においては異本『即身成仏義』③と安然の『教時義』とにおいてはほぼ同様な引用がなされているのだが、原典のどの部分を引用したかを検出できなかつた。

(異本『即身成仏義』③、『華嚴経』に云く)として

遍く十方に詣て成仏を求む。身心久く成仏せることを知らず云云⁽¹⁶⁾

(異本『即身成仏義』③、「経に云う」として)

往昔に精進して生死を捨つ。生死即涅槃と知らず⁽¹⁷⁾

(安然『教時義』)

華嚴経に云く、遍く十方に詣りて成仏を求むれども、身心本より成仏せることを知らず。往昔より精進して死を捨つれども生死即涅槃なることを知らずと⁽¹⁸⁾

また『諸法無行経』については、下記の通り引用されているのだが、

(異本『即身成仏義』③)

無行経に云く、婬欲即ち是れ道。恚癡も亦復然なり。⁽¹⁹⁾

(『教時義』)

無行経に云く、貪欲即ち是れ道。恚癡も亦復然なり。⁽²⁰⁾

どちらの文章もそのままでは検出されず、『諸法無行経』の「貪欲説涅槃 恚癡亦如是」⁽²¹⁾という部分を引用したものと推測される。しかしこの二者を比較してみると、『諸法無行経』の原典より、異本『即身成仏義』

③の引用と安然の引用のほうが類似していること認められ、関連性が窺える。

三 安然の即身成仏思想の考察

（1）安然の『即身成仏義私記』に見られる即身成仏観

『即身義私記』に見られた大きな特徴としては、『法華経』の即身成仏と『摩訶止観』の即身成仏とを述べていたことである。

本書冒頭には序文があり、下記のように述べられている。

夫れ以みるに、妙法蓮華は一切如来の微妙の因果、摩訶止観は一切菩薩の速疾の径路なり。この乗に乗る者は、白牛もて運載し、直に道場に至る。此の観を観する者は、神通もて飛騰し、疾かに宝処に行く。⁽²²⁾ここでは、『法華経』と天台大師智顗の『摩訶止観』を挙げて、前者は「白牛もて運載し、直に道場に至る」、後者は「神通もて飛騰し、疾かに宝処に行く」としている。どちらにおいても「直に」「疾かに」というような速疾成仏を強調する記述が読み取れる。また安然の即身成仏思想の基盤となるものは、『法華経』・『摩訶止観』であり、この二つの即身成仏観があると考察できる。続いて、

是を以て八歳の龍女、頓に正覺の台に座し、三生の弟子、速やかに正聚の位に入る。煩惱是れ菩提なれば、身因を断することなく、生死是れ涅槃なれば、陰入を傷むるなし。皆身を捨てず、身を受けず、悉く現身において成仏を得。⁽²³⁾

として『法華経』の龍女成仏について言及している。龍女成仏の思想は、『法華経』提婆達多品（『大正蔵』九・三四b―三五c）の成仏論で、伝教大師最澄（七六七―八二二）が著した『法華秀句』第八「即身成仏化

導勝」に詳しく説かれており、それを受け継いだものと思われる。またここでは、「皆身を捨てず、身を受けず、悉く現身において成仏を得」としており、「現身に」ということが非常に強く論じられている。この序文からは、安然の即身成仏思想は『法華経』・『摩訶止観』の二つが基盤となっており、速疾成仏・現身成仏という面が強調されていることが読み取れる。

安然の『法華経』を基盤とした成仏論は、最澄の龍女成仏論を受け継いでいるものと考えられ、一方の『摩訶止観』の成仏論に注目してみると、『即身義私記』第四十八問答において、

問、位、既に六有る。止観方に六か。

答、理、不同と雖も、猶お是れ、理性止観、名字、観行、随聞随観し、乃至究竟なり。皆止観と名く。即ち所問の如し。⁽²⁴⁾

という問答がなされている。問における「位既有六」とは、六即位のことである。天台宗では成仏の階梯を蔵・通・別・円に分けて論ずるが、それとは別に円教独自の六即説を立てている。1、理即位（本来的に成仏の実在がある）2、名字即位（これを概念として理解する）3、観行即位（体験しようとする観心修行）4、相似即位（六根清浄となり真の悟りと相似する）5、分証（真）即位（真如の部分を体現する）6、究竟即位（完全なる悟り）の六のことで、末本文美士先生は「六即は、言うまでもなく天台円教において立てる理即・名字即・観行即・相似即・分証即・究竟即の六であるが、それ自体、もともと円教のもつ段階否定性と段階性を巧妙に接合した理論であった。即ち、円教の立場は本来別教と異なり、段階性を否定するところにその特徴があり、凡夫の段階で究極の悟りが実現していると説く。しかし、それだけでは修行の過程の意味がなくなる。そこで段階性が回復されなければならない。この相反する要求を接合するところに六即が成り立つ。それは、六段階を立てるところに段階性が生きるとともに、そのすべての段階が「即」といわれるところに

即身成仏思想についての一考察（間野）

終始一貫する絶対性の実現が表現される。それ故、それは直ちに即身成仏と結びつくわけではないが、凡夫の段階から絶対の実現を認める点で、凡夫の即身成仏を重視する日本天台の即身成仏論と結びつく可能性は十分に持っており、安然によつてこの点が取り上げられた点は、極めて注目される。⁽²⁵⁾ 即ち安然是従来『法華経』の龍女即身成仏に、『摩訶止観』を基盤とした六即の即身成仏を加えることによつて、凡夫の段階において成仏するということを残しつつ、修行の段階性というものを重要視していたものと考えられる。つまりそれは龍女即身成仏に対して、実践というものの不足を感じ取ったものと推考される。

第六十一問答には、即身成仏についての論が展開されている。

問、云、天台の意、即生成仏と隔生成仏とは、俱に即身成仏の義を立てるか。⁽²⁶⁾

として、即身成仏とは、この生において成仏することと生を隔てて成仏することの二義があるのかということとを問うている。この問答では、「即生か」「隔生か」といった、「現身成仏」の思想が強調されていると読み取ることができ、答として、

答、今円宗の意、即生・隔生、俱に即身成仏の義を立つべし。⁽²⁷⁾

として、即生・隔生の即身成仏を立てることを説いている。その理由として、

何を以て故に。若しは龍女現身に専ら即身成仏の化道を顕するが故に。而して即身成仏の化道、諸宗の所依の経より勝れたりと言えり。若しは三根声聞皆初住に入るとは、即身と即入に異無し。故に即身入と言ふに別無し。余教の凡位皆復是の如し。當に知るべし。龍女は仏の三輪を現じ、声聞は声聞の三輪に應ず。普現三昧は諸威儀を現ずると雖も、其の自證は滅定より起こること無し。皆身を捨てず、身を受けず即ち證に入る。故に即身成仏と言ふ。是れ則ち即生に分真、究竟の仏を成ずるなり。若しは六根極遅は、三生に見ることを得。是れ則ち三生に相似の仏となり、法を聞き忍を得。則ち此の身を捨てず

正聚位に入る。前の二生中は、但だ名字を聞き、また観行を修す。若し名字を聞かば、名字即なり。是れ名字即身成仏なり。若し観行を修すれば、観行即菩提なり。是れ観行即身成仏と云う。皆身を捨てず身を受けず現身に成仏を得。是の故に円人、若し真位に入らば、生を隔てると雖も、何生何位に随つて、皆即身成仏と言うべし。若し爾らずんば、六即菩提何に寄り立つを得るや。⁽²⁸⁾

と述べている。ここでは、『法華経』の龍女が現身に即身成仏したことにより教化を顕現することから、諸宗の経よりも勝れている、としている。この部分からは、最澄の龍女即身成仏思想を踏襲していると考察できる。そして、「若しは六根極遅は、三生に見ることを得。」以下の記述からは、最澄の『法華秀句』「即身成仏化導勝」に論じられている、「上品の利根は一生に成仏し、中品の利根は二生に成仏す。下品の利根は三生に成仏す」⁽²⁹⁾という思想に、六即成仏の思想を絡めて論じていると考察される。また、「皆身を捨てず、身を受けず即ち證に入る」・「皆身を捨てず身を受けず現身に成仏を得」と二度も繰り返して述べていることから、この身を捨てずに来世においては身を受けず現身に成仏すると言うことが安然の即身成仏観を顕著に表している表現であると推考できる。

(2) 安然の『真言宗教時義』に見られる即身成仏観

『教時義』の考察方法として、「即身成仏」というタームに注目して考察を行った。本書において「即身成仏」というタームは、『菩提心論』の引用、『即身成仏義』の名称も含めると、巻一に二回、巻二に一回、巻三に四回、巻四に四回の合計十一ヶ所に使用されている。今回は特に注目された二つの記述を挙げてみると、巻三において、「大日経義釈」・「大日経」・「菩提心論」・「尊勝瑜伽」・「観音瑜伽」・「五秘密」の文を挙げ、「此等の文によつて即身成仏の義を立つるのみ。」⁽³⁰⁾と述べていることから、次の引用は即身成仏の證文としてとら

即身成仏思想についての一考察（間野）

えることができる。

・大日経義釋に大論の神通乗の文を引きて以つて真言門の菩薩となせり。⁽³¹⁾
 ・大日経に説く初發心時乃至十地次第に此の生に満足すと。亦説く第三劫を越ゆる時、余教の菩薩無量無數劫の中に修行する所の功德、即ち皆悉く具足すと。⁽³²⁾
 ・菩提心論に云く、今真言行の菩薩は已に二乗の地を越え亦十地の菩薩の境界を超へ、乃至凡より仏位に入る者なり。即ち此の三摩地とは又云く惟真言法中のみ即身成仏するが故に此の三摩地の法を説く。余教の中に於ては闕して書せずと。又云く、若し人仏恵を求めて菩提心に通達すれば父母所生身にして速かに大覺の位を證すと。⁽³³⁾

・尊勝瑜伽には三阿僧祇劫は一念に超越すと説く。⁽³⁴⁾

・觀音瑜伽に云く、菩薩地及び如来地を超ゆと。⁽³⁵⁾

・五秘密に云く、顕教に於て修行する者は久久しく三大無數劫を経て然して後に無上菩提を證成す、若し毘盧遮那自受用身智の説く所の内證の自覺聖智の法及び大普賢金剛薩埵、他受用身智に依るときは則ち現生に於て曼荼羅の阿闍梨に遇逢ひ乃至灌頂受職の金剛名号を受け、此れより已後、廣大甚深不思議の法を受得し、二乗十地を超越す。乃至人法二執悉く皆平等にして現生に初地を證得し、漸次に昇進す。乃至亦須臾の頃に於て時に応じて身中の一大阿僧祇劫に集むる所の福德智慧を集得す。則ちこれ仏家に生在するなり云云。⁽³⁶⁾（傍線は筆者による）

以上のように四経・二論より證文を挙げている。弘法大師空海は即身成仏の證文として、二経一論八箇の證文を挙げている。その内わけは、『金剛頂一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』・『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』二文・『成就妙法蓮華王瑜伽觀智儀軌』の金剛頂経系統の四文と『大日経』の「悉地出現品」・「真

言行学処品」から二文、『菩提心論』から二文となっている。弘法大師空海の證文と安然の證文とを比較すると、『大日經』・『菩提心論』からの引用は共通しているが、「尊勝瑜伽」・「觀音瑜伽」は安然が独自に證文として引用しており、それは弘法大師空海の即身成仏思想を受容しながらも、新たに天台密教の即身成仏思想というものの確立を試みていると推察される。そして、即身成仏の證文を挙げた後に次の問答がなされている。

問、言う所の惟し真言法中のみ即身成仏するが故に此の三摩地の法を説く。余教の中に於ては闕して書せずとは、法華八歳の龍女は即身成仏し、胎經には魔梵釋女皆身を捨てず身を受けずして悉く現身に於て成仏することを得と、無量義經には即ち是の身に於て無生忍を得、生死煩惱一時に断壊すと。仁王經には五千の女人は現身に成仏せりと。此等の大乘は真言法に非ず。何ぞ惟真言法中のみ即身成仏するが故にと言うや。

答、此等の大乘は並に是れ唯理秘密の真言教法なり。具に前に説くが如し。故に菩提心論に華嚴の初發心住の文、涅槃の南無純陀身は人身なりと雖も心は仏心に同じの文を引きて以つて真言菩薩の速證大覺の證となす。又金剛頂疏に無量義經の即於是身、得無生忍等の文を引きて以つて真言菩薩の現生に速かに初地に入る證文となす⁽³⁷⁾

證文として引用した『菩提心論』の文に対して、『法華經』の龍女成仏説⁽³⁸⁾、『胎經』として『菩薩從兜術天降神母胎説広普經』の魔梵釋女が皆身を捨てず身を受けずして悉く現身において成仏したという成仏説⁽³⁹⁾、『無量義經』のこの身において無生忍を得るという成仏説⁽⁴⁰⁾、『仁王經』として『仁王護国般若波羅蜜多』の五千の女人が現身に成仏したという成仏説⁽⁴¹⁾、これらは大乘であり真言法ではないとして、何故即身成仏の義が真言法以外にも説かれているのかを問うている。それに対して、これらの成仏説を説いている大乘は唯理秘密の真言教法と答えている。ここでは、安然が『法華經』・『胎經』・『無量義經』・『仁王經』の成仏説も即身成仏であ

るとしていること、安然が円仁（七九四―八六四）の『蘇悉地経疏』巻一において説かれている「唯理秘密教・事理俱秘密教」の思想を受け継いでいること、前述した證文に『菩提心論』・『金剛頂疏』の文を付け加えていることが考察される。

（3）安然の『胎藏金剛菩提心義略問答抄』に見られる即身成仏観

『菩提心義抄』の考察方法として、巻一の末に「即身成仏」というタームが頻繁に説かれている箇所が見られ、その部分を中心に考察を行った。注目される記述を検討してみると、

金剛頂經に、一切如来大菩提心普賢大菩薩、道場に座したもう時、一切如来集まりて、一切義成就菩薩亦薩縛羅他悉地と云う。亦悉達多と云う。往詣して受用身を現じて告げて言く、汝當に云何が大菩提を證すべきや。

一切如来の眞実、諸苦行等を忍び、乃至五相成身によつて、三十七を流出するを知らず。是れ諸仏、内證法樂を以て諸菩薩をして亦此の法樂を受けしめんが爲に、五相成仏を示現す。故に自他二受用義を具すなり。若しは守護国界主經に、釈迦菩薩無量劫を経て、菩薩行を修し、最後身に至り六年苦行す。道場に座す時、無上菩提を證し、毘盧遮那を成ずること能わず。時に一切仏告げて言く、汝、當に鼻端に諦かに月輪を觀じ、中に唵字を觀ずべし。釈迦菩薩、教を受け諦かに觀じ、正覺を成ずることを得たり。是れ後身の菩薩なり。若しは法華經に、龍女海中で文殊従り此の經を聞き、受記を得て初住に入る。即ち南方に往き八相作仏の時、必ず此の觀を修すなり。若しは十住断結經に、菩薩獨覺の仏を行ず。像法尽きて樹皮の声を聞き無上道を證す。四方を顧視するに翼従するものを見ず。相を隱し形を秘す。一常人の如し。此の人亦此の觀を修すべきなり。⁽⁴³⁾（傍線は筆者による）

以上の四經からの例を挙げて、次のように述べている。

故に今末世に設し、此の觀を修さば、即身成仏の人亦當に形を隠し一ら常人の如くすべし。有縁の人に非れば誰ぞ其の仏を見ん。⁽⁴⁴⁾

ここでは安然の所見においては、『金剛頂經』(『金剛頂一切如来真實撰大乘現證大教王經』)⁽⁴⁵⁾・『守護国界主經』(『守護国界主陀羅尼經』)⁽⁴⁶⁾・『法華經』(『妙法蓮華經』)⁽⁴⁷⁾・『十住断結經』(『最勝問菩薩十住除垢断結經』)⁽⁴⁸⁾の成仏説は即身成仏であるとしていることが考察される。そして引用文中には、「五相成身によつて」・「此の觀を修すなり」・「此の觀を修すべきなり」等とみられ、即身成仏するための五相成身觀の必要性を説いていることから、行というものを重要視しているということが考察できる。

そして、『法華經』の龍女の成仏に対して次の問いをしている。

問、法華龍女、海中に經を聞き即身成仏するに、此の觀を用いず。何ぞ必ず此の觀を用いると云うや。⁽⁴⁹⁾
その答に対して次の答を出している。

答、二の理證あり。一には心地觀經に云く、一切有縁の得記の人は、此の法に由り修成せざるは無し。二には菩提心論に云く、惟し真言法中のみ即身成仏す。故に是れ三摩地法を説く。諸教の中に於ては闕して書せず。といえり 故に知んぬ、龍女は既に是れ有縁得記の即身成仏の人なるが故に、必ず此の觀を用い、南方に八相作仏するなり。⁽⁵⁰⁾

ここでは『心地觀經』(『大乘本生心地觀經』)⁽⁵¹⁾と『菩提心論』(『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』)⁽⁵²⁾の證文を挙げて、『法華經』の龍女も即身成仏の人であるので、この五相成身觀を修していたと述べている。『法華經』の龍女が五相成身觀を修していたという論述は、『即身義私記』・『教時義』には見られなかった解釈であり、注目される記述である。

次に経力と五相成身觀の關係が言及されている。

問、仁王經に云く。五千の女人、現身に成仏すとは、是れ仏世に仁王經を聞きて成仏するなり。胎經に、魔梵釈女皆身を捨てず身を受けずして悉く現身に於て成仏することを得と云うは、是れ無仏世に自ら觀じて成仏するなり。無量義經に、是の經を持す者は即ち是の身に於て、無生忍を得と云うは、是れ仏の滅後に經を持して成仏するなり。而るに何ぞ論に、惟し真言法中にのみ即身成仏すと云うや。若し此れ等の即身成仏の人、皆此の觀を修するならば、何故に論に是れ三摩地法を説き諸教中に於て闕して書せずというや。又、皆此の觀を修して成仏せば、彼の經力等即ち不用と成る。⁽⁵³⁾

ここでは『教時義』⁽⁵⁵⁾においても言及がみられた、『仁王經』（『仁王護国般若波羅蜜經』）・『胎經』（『菩薩從兜術天降神母胎說広普經』）⁽⁵⁶⁾・『無量義經』等の成仏説を挙げて問いかけており、それに対して次のように答を出している。

答、言う所の真言とは大日經義釈に云く、梵音に慢怛羅と云い、此れ真言と云う。龍樹の釈論には之を密号と謂う。実語如語不妄不異の語の故に真言と名く。故に凡そ真如法性を説く教を皆、真言と名く。故に凡そ法華等の諸大乘は皆、真言秘密教と名づくるなり。唯法華等には皆此の三摩地法を説くと雖も、伝法の菩薩、闕して書せざるなり。若しは仏世に於て經を聞き、若しは滅後に於て經を持さば、心覺開解し仏道を成ずることを得。仏道を成ずる時、内心に法を觀ずるを三摩地と名く。是れ初住の即身成仏と名く。⁽⁵⁷⁾

『菩提心論』の「真言」の由来を述べるのに『大日經義釈』⁽⁵⁸⁾の文を引用し、「実語如語不妄不異の語の故に真言と名く」としている。そして、真如法性を説く教は皆、真言と名づけるとして、法華宗等の諸大乘も真言秘密教であるとしている。ただ法華宗等も三摩地法は説いているが、伝法の菩薩が欠して書かなかったとしている。また、「皆此の觀を修して成仏せば、彼の經力等即ち不用と成る。」という問に対しては、經を聞き、

滅後において経を持せば仏道が成就し、その成就する時、内心に法を観じることが三摩地法・五相成身觀であるとして、それが即身成仏であるとしている。ここでは、『法華經』の經力と五相成身觀との共生させている趣旨を考察でき、天台円教と密教を融合させようとしていることを考察できる。

そして、正本『即身成仏義』の二頌八句が引用されている問答を見ることが出来る。

問、抑も、即身成仏と言うは、即ち一生に於て成仏すと為すや、凡夫成仏と為すや。⁽⁵⁹⁾

答、両義俱に得たり。即ち一生に於て成仏すること前の如し。又、凡夫成仏とは、即身成仏義の云うが如し。六大無碍にして常に瑜伽なり体 四種曼荼各々離れず相 三密加持すれば速疾に顕る用 重重帝網

なるを即身と名く^{無碍} 法然に薩般若を具足し、法仏の成仏 心数心王剎塵に過たり無数 各々五智無際

限智を具す輪円

円鏡力の故に実覺智なり所由。此の四句は成仏の二字を明かす。⁽⁶⁰⁾

即身成仏には二義あり、一生において成仏することと凡夫成仏とがあると述べ、凡夫成仏の證文として正本『即身成仏義』の二頌八句の即身成仏頌を引用している。安然是正本『即身成仏義』の所説を、凡夫の即身成仏であると受け止めていることが考察される。そして、二頌八句のそれぞれの句を次のように解釈する。

答、若し凡夫身中の六大^{地水火風空識}即ち是れ法界体性と覺らば、即ち凡夫の六大は直ちに諸仏の六大を成ず

るを以ての故に即身成仏と名く。彼の義釈の云く、初に六大とは、大日經に云く、我覺、^{庵字の義、即ち識大}本不

生、^{阿字の義、即ち地大}語言道を出過し、^{嚩字の義、即ち水大}諸過の解脱を得、^{羅字の義、即ち火大}因果を遠離し、^{吽字の義、即ち風大}空は虚空に

等しと知る、^{欠字の義、即ち空大}是の如く六大は無碍相入して、常住不變の故に、無碍常瑜伽、と云う。瑜伽は此

れ相応と云う。相応とは渉入の義なり。是れ法の体を挙ぐ。次に、四種曼荼各不離、とは、大三法羯の四曼荼羅は不離一体なり。是れ法の相を挙ぐ。次に、三密加持速疾顯、とは、三密行を修して加持するに速やかに大日を現ず。是れ法の用を挙ぐ。次に、重重帝網名即身、とは、諸尊の三密と我三密と円融

無碍にして、猶帝網の即身と名くるが如きなり。是れ無碍を挙ぐ。次に、心数心王過刹塵、とは、心王とは体性智、心数とは多一識なり。是れは無数を挙ぐ。次に、各具五智無際智、とは心王心数に各に五智を具して際限有ること無し。是れ輪円を挙ぐ。次に、円鏡力故実覚智、とは、心鏡寂照にして不倒不謬なり。是れ所由を挙ぐ。此の後の四句は共に成仏を明かす。⁽⁶¹⁾

安然の解釈では、凡夫の六大を法界体性と覚った時、その凡夫の六大が直ちに諸仏の六大を成ずることを即身成仏と名づける、としている。そして、二頌八句のそれぞれの句を解釈していくのであるが、この解釈の中に「法然具足薩般若」の句の解釈がなされていないことが疑問に残る。⁽⁶²⁾ここでは安然が、正本『即身成仏義』に説かれるの成仏論を凡夫の即身成仏としており、明白に弘法大師空海の所説を受容していることが注目される。

四 結 語

今回の研究では、『蓮華三昧経』を手掛かりとして異本『即身成仏義』と安然に係性を見出し、異本『即身成仏義』③の引用經典と安然の『教時義』の引用經典との比較検討を行った。それによって多少の関連性は窺えたのであるが、『教時義』では五十を超える経論から證文が引用されており、あくまで推論の域を脱し得ない。この問題は、安然の他の著作も視野に入れて今後も研究していきたい。

また安然の即身成仏觀の特徴として、『即身義私記』においては、弘法大師空海の所説は見られず、天台宗に從來存在した『法華経』の龍女即身成仏に、『摩訶止観』を基盤とした六即の即身成仏を加え、天台宗と密教を融合させるべく独自に即身成仏思想の方向性を見出したと考えられる。しかし『教時義』においては、

安然が密教へと傾倒した態度が見られ、弘法大師空海が即身成仏の證文としたものに加え安然が独自に蒐集した證文を見出すことができた。そして『菩提心義抄』においては、弘法大師空海の即身成仏思想を明らかに受容していることが確認された。即ち安然は天台宗の教理を中心とした即身成仏思想の確立を目指したが、次第に密教へと傾倒していくようになり弘法大師空海の思想に接近を試み、それを受容することによって新たな即身成仏思想を展開していったものと考察する。今後の展望としては、更に深く安然の思想を考えていくとともに、順序としては逆になってしまったが、円仁・円珍等の台密の成仏論を真言密教の立場より研究していきたい。

註

- (1) 『正續藏經』三・八一七上 岩波書店 日本思想体系九『天台本覺論』九七頁
- (2) 『大正新脩大藏經』(以下『大正藏』とする) 五六に収録。(一八九―二〇二頁)
- (3) 『大正藏』五十六・一八九c
- (4) 岩波書店 日本思想体系9『天台本覺論』四五二頁・五〇九頁・水上文義「蓮華三昧經の成立をめぐって」
- (5) 『印度学仏教学研究』(以下『印仏研』とする。二十八―二)を参照。
- (5) 『大正藏』七十五・三八四c
- (6) 『大正藏』七十五・三九七a
- (7) 『大正藏』七十五・四七〇c
- (8) 『大正藏』七十五・五二五c
- (9) 大久保良峻先生は、「この經は不空の翻訳と伝えられているが、実は日本撰述と目されている。しかし、この經の成立に関する詳細についてはほとんど解明されていない。そこで、はつきりしていることで年代的にもつ

即身成仏思想についての一考察（間野）

とも遡れるのは何かというに、安然がこの偈文を『蓮華三昧経』の经文として、諸著作の随所に引用していることが挙げられる。」（大久保良峻『天台教学と本覚思想』一八頁―二〇頁）と述べられている。また水上文義先生は、「蓮華三昧経のいわゆる選者には、すでに円珍、安然あるいはその周辺人物が考えられている。それは、この経名ないし偈文の収録される最初の文献が円珍の講演法華儀、安然の教時問答、菩提心義抄等あたりから、という理由による。」（水上文義『蓮華三昧経の成立をめぐる』『印仏研二十八―一』）また「蓮華三昧経の本覚讃と通称される八句の偈は、その成立の最上限に円仁―安然がおさえられてくることには問題がなかろう。しかも蓮華三昧経の経名を安然は知り、円珍は知らなかった。（中略）蓮華三昧経は円珍―安然の時代の、安然の活動期に成立したもので、撰者は安然のごく周辺の人物または、安然その人であったのではなからうか。」（水上文義『蓮華三昧経の成立をめぐる』『印仏研二十八―一』）と結論付けている。

- (10) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・四二五a)
- (11) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・四一五c)
- (12) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・三七八b)
- (13) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・三八二a)
- (14) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・四一九b)
- (15) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・三八八b)
- (16) 『弘法大師全集』（以下『弘大全』とする）第四輯二十五頁
- (17) 『弘大全』第四輯三一頁
- (18) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・三七八b)
- (19) 『弘大全』第四輯三一頁
- (20) 『教時義』〔大正蔵〕七十五・三八二a)

- (21) 『大正蔵』十五・七五九c
- (22) 『大日本仏教全書』(以下『仏全』とする) 二十四・一七九頁下
- (23) 『仏全』二十四・一七九頁下
- (24) 『仏全』二十四・一九六頁下
- (25) 末木文美士『平安初期仏教思想の研究』三〇三頁
- (26) 『仏全』二十四・二〇一下
- (27) 『仏全』二十四・二〇一下
- (28) 『仏全』二十四・二〇一下
- (29) 『伝教大師全集』第三卷・二六五～二六六頁
- (30) 『大正蔵』七十五・四二五a
- (31) 『大正蔵』七十五・四二五a
- (32) 『大正蔵』七十五・四二五a
- (33) 『大正蔵』七十五・四二五a
- (34) 『大正蔵』七十五・四二五a
- (35) 『大正蔵』七十五・四二五a
- (36) 『大正蔵』七十五・四二五a
- (37) 『大正蔵』七十五・四二五a } b
- (38) 『大正蔵』九・三五b } c
- (39) 『大正蔵』十二・一〇三四c } 一〇三五a
- (40) 『大正蔵』九・三八八b

即身成仏思想についての一考察（間野）

- (41) 『大正蔵』 八・八四一 a
- (42) 『大正蔵』 六十一・三九三 b
- (43) 『大正蔵』 七十五・四七〇 c } 四七一 a
- (44) 『大正蔵』 七十五・四七一 a
- (45) 『大正蔵』 十八・二〇七 c
- (46) 『大正蔵』 十九・五七〇 c
- (47) 『大正蔵』 九・三五 b } c
- (48) 『大正蔵』 十・一〇〇三 c } 一〇〇四 a
- (49) 『大正蔵』 七十五・四七一 a
- (50) 『大正蔵』 七十五・四七一 a
- (51) 『大正蔵』 三・三二八 a
- (52) 『大正蔵』 三十二・五七二 c
- (53) 『大正蔵』 七十五・四七一 b
- (54) 『大正蔵』 八・八四一 a
- (55) 『大正蔵』 十二・一〇三四 c } 一〇三五 a
- (56) 『大正蔵』 九・三八八 b
- (57) 『大正蔵』 七十五・四七一 b } c
- (58) 『正統蔵経』 三十六・五二上
- (59) 『大正蔵』 七十五・四七二 a
- (60) 『大正蔵』 七十五・四七二 a } b

(61) 『大正蔵』七十五・四七二b

(62) 『大正蔵』七十五・四七二の脚注において「法然具足薩般若⑦法仏成仏」について、「⑦法仏成仏四字甲本乙本俱作細註」となっており、「法然具足薩般若」の解釈が無いことと関連性があると推測され、古写本を調べる必要があると思われる。

(63) 「貞観五年六月の法華会に於て、講師の唱える即身成仏の説に従わず、心作仏のみ許して身作仏を許さない一類の執者があつて一大論争に発展した。当時の座主慈覚大師は深くこれを憂えて、この大論争の後に於ても毎月門下を集めて即身成仏の疑問の旨に答えて即身成仏の義について解説せられた。それ等の疑問解説を集成して六十四箇の問答形態と二十箇の会難形態に纏めたものがこの私記一部であることを述べている。このことから私記一部の撰述の由来は、貞観五年（八六三）の六月の法華会の論争とその後の慈覚大師及びその門下との間に交わされた質疑応答とを直接動機としてゐることがわかる。」（池山一切円「安然の即身成仏義私記について」『印仏研』二十五・一二）

【キーワード】即身成仏思想、異本『即身成仏義』、安然